

防衛大学校本科第45期、理工学研究科第38期及び総合安全保障研究科第3期学生卒業式防衛大学校長式辞

(平成13年3月18日)

防衛大学校本科第45期、理工学研究科第38期及び総合安全保障研究科第3期の学生諸君は、本日をもって所定の課程を修了し、4年及び2年にわたる小原台生活に別れを告げることになりました。

本日、卒業の栄を得ますのは、本科学生357名、理工学研究科学生65名及び総合安全保障研究科学生17名であります。ここに卒業式を挙げるに当たり、卒業生諸君に対し、私は本校の教職員、指導教官一同と共に、心からお祝いを申し上げます。



第7代学校長 西原 正

本日のこの栄えある式典に、国務ご多忙の折りにもかかわらずご臨席賜りました森内閣総理大臣^{注(1)}、井上参議院議長^{注(2)}、斉藤防衛庁長官^{注(3)}をはじめ、国会議員各位ほか内外多数の来賓各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

また卒業に至るまでの間、防衛庁・自衛隊の関係者各位、官民の諸機関並びに在日米軍、各国大使館等から寄せられましたご指導、ご協力に対しましても、併せて厚くお礼を申し上げる次第でございます。

更にはまた、遠路はるばるご参列賜りましたご父兄の皆様方に対しましても、今日までのご支援とご理解に深く感謝申し上げますとともに、ご子女のご卒業を心からお祝いするものであります。またこの式典には、防大同窓生のうち、第2期生の方々をお招きしておりますが、これらの大先輩も43期後輩の諸君の門出を祝福して下さっています。

さて諸君は21世紀の最初の防大卒業生です。本科卒業生は本日任官し、4月からは陸・海・空自衛隊のそれぞれの幹部候補生学校に進み、いよいよ幹部自衛官になるための教育を受けます。そして1年後には3尉となって幹部自衛官となります。研究科卒業生においては、部隊や機

注(1) 森 喜朗

注(2) 井上 裕

注(3) 斉藤斗志二

関に復帰し、研究科在学中に修得した知識や技能を生かして、それぞれの任務に就くこととなります。

また本日の卒業生には、6名の本科留学生及び3名の研究科留学生が含まれております。中には祖国の部隊に復帰するもの、防大研究科へ進むもの、あるいは幹候校へ入るなりして、それぞれの場で国防の任に就きます。

私はここにそれぞれの諸君の洋々たる前途を祝福し、はなむけの言葉を述べたいと思います。

本科卒業生の諸君、諸君は平成9年4月、大きな希望とともに緊張感を抱いて、ここ小原台の校門をくぐったことでしょう。それからの4年間、毎日の忙しい日課の中で、勉学、校友会の活動などを見事にこなし、逞しく成長しました。精神的にも、肉体的にも、試練に耐えた諸君が、堂々と胸を張って卒業していく姿はまさにまばゆいばかりです。諸君が、防大生活が一般大学では得られないかけがえのない修練の場であったことを認識し、自信と誇りをもって力強く幹部自衛官への道を邁進してくれることを期待します。

同時に諸君は、自分たちに課せられた責任が極めて大きいことをよく自覚すべきです。第一に、幹部自衛官は、防衛の専門家即ち防衛のプロフェッショナルでなければなりません。諸君が防衛大学校で学んだことは、あくまでもそのための基礎的な勉強であったといえます。今日の国内外の激しい情勢の中で、爆発的に情報が増加していく状況などに対応していくためには、知識と技能の一層の向上が必要です。それをどう発展させていくかは、諸君の今後の努力次第です。

第二に、本校では、諸君に対して幅広い視野と柔軟な思考能力を培う努力をしてきました。諸君は、「木を見て森を見ない」態度は厳に回避すべきこと、また一つの出来事には多様な解釈が可能であること、したがって問題の解決は既成の概念のみでは不十分であることなどを学んだはずですが。諸君がこれらを元に、自衛隊の各職種においてその能力を更に磨き、発揮してくれることを期待します。今後、防衛態勢や防衛戦略などを考察する上でも、幅広い視野と思考能力が益々重要になります。

第三に強調したいのは、諸君が高い職業倫理をもって職務に就くべき点です。自衛隊の国防力は、本来侵略を阻止するためのものですが、同時に物理的には危険な殺傷力にもなり得るものです。この破壊力を直接操作する組織の上に立つものは、高度の倫理観をもっていなければなりません。また幹部自衛官が組織の中で指導力を発揮するために

は、強い道義的責任感と高潔さをもつことが肝要です。

研究科卒業生においては、本校で修得した知識と技能を存分に生かして、自衛隊に必要な技術の先端化を促進し、安全保障環境の情勢分析、防衛戦略、同盟戦略の構築などに、寄与してくれることを望みます。21世紀の国際社会で日本が応分の役割を果たしていくためには、自衛隊は装備と防衛政策において諸国から注目される組織になる必要があります。

平和な時代が長く続く時は、堅固な部隊組織を維持することが困難になります。戦う目標が直前にないとき、部隊は練成する目的を失いがちです。しかし「百年兵を養うは一日の戦いのため」という格言があるように、兵力を百年かけて養成しておくのも、たった一日の戦争に備えるためと言われてきました。しかも危機は時を選ばずにやってきます。幹部自衛官の心のゆるみは、国防上取り返しのつかない結果を招きかねません。

留学生諸君に対して一言付け加えます。諸君は、異国での勉学訓練で、人間的に一回りも二回りも大きく成長したことと思います。言語、文化の異なる社会で忍耐強く、かつ精力的に所定の課程を修了したことに心から敬意を表します。これからは、この小原台で修得した多くの貴重な経験と培った友情を基に、母国の国防ばかりではなく、日本との架け橋となってくれることを期待します。そしていつの日か、本校の卒業生同士が、国際舞台で、平和と安全のためにもともに働く機会があることを望みます。

諸君の小原台での生活は、まさにいまその幕を降ろさんとしています。これからは、いかなる任務、いかなる境涯にあっても、学生綱領にある「廉恥、真勇、礼節」を心に秘めて、「真の紳士淑女にして、真の武人」となってくれることを希望します。我々教職員及び指導教官は、諸君が21世紀の日本の将来と国際平和のために粉骨砕身して事に当たってくれることを、この小原台から祈っております。

諸君、卒業おめでとう。